

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成30年度研究開発実施報告書

「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」

研究開発領域

「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの
確立」

辻井正次
(中京大学現代社会学部)

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. 中間達成目標	2
2-3. 実施内容・結果	3
2-4. 会議等の活動	9
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	10
4. 研究開発実施体制	10
5. 研究開発実施者	13
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	16
6-1. シンポジウム等	16
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	16
6-3. 論文発表	16
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	16
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	17
6-6. 知財出願	17

1. 研究開発プロジェクト名

「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの確立」

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

研究開発期間の初期においては、(発達障害の大多数となる)知的な遅れがない、もしくは比較的軽度な知的障害を伴う発達障害のある人たちの社会的不適応に関して、実際にプログラムを取り組んでいく。地域で実態を科学的に把握し、また、アプリ等の活用状況を把握し、青年成人期当事者と支援者との実際の支援経過や他者との交流のニーズを蓄積し分析していく。そして、アプリ開発においては、活用試験等を挟みながら、発達障害者の日常生活スキルや就労ソフトスキル(職務そのものに関するハードスキルではなく、職場での人間関係等のスキルをソフトスキルとしている)を促進するアプリを開発する。アプリには、発達障害者のセルフ・チェックのためのアセスメント・ツールや他者との交流ニーズを把握し、支援者との状態把握と助言を交換する機能を追加する。そして、そこで得られたチェック内容に関しての分類を医療・福祉両面から分析を行う。本アプリは、近年普及している一般向けの関係構築コンテンツとは異なるものとなっており、発達障害者の障害特性を配慮した機能を追加する。2年目では、支援の経過と日常生活や社会性のスキルの実態を蓄積し分析し、支援に取り組む事業所等での活用を進めていく。3年目以降では、支援ニーズの高い発達障害者に本アプリのチャット機能を活用してもらう。チャット上では支援者も関与しながら、彼らに交流の場を作ってもらう。そして、現実の生活でその発達障害当事者と一緒にグループ活動の場を持ち、一定の関係を築いてもらった後に、福祉的支援や就労や自立支援等につなげていく。また、実際にアプリを提供している間にも、状況に応じてアプリの機能を追加する。ヴァーチャルなつながりから現実のつながりを同期的に提案していく上では、いくつかの現実的な工夫を加えていく。

成果としては、発達障害青年成人の支援者との支援経過と地域でのつながり実態に関するデータや彼らの関心や余暇の過ごし方等を把握することができる。また、支援において有効な、スマホ等を活用した新しい支援経過を把握し分析し、次の有効な支援につなげる支援ツールを開発することができ、そのことによって、引きこもり等の社会的孤立状態にある当事者に対する新しい支援アプローチを開発することができ、現実の支援につながることで適応的に暮らすことができる当事者を増加させていくことができると期待される。支援が広く行われるよう、支援手法に関するマニュアルを作成し公開する。また、彼らに対して交流の場を用意することで予防的な活用が可能になり、「親亡き後」に悩む年長いた保護者も含め、ひとり暮らしを希望する当事者を実際の独り暮らしにつなげていく効果を持つと考えられる。このことは、「親亡き後」に悩み、親子心中リスクがある家族に対して必要な現実的な希望を示すことにもつながると考えられる。

2-2. 中間達成目標

中間達成目標としては、実際に運用するためのアプリの開発が中核となる。その後、国内の各地で実証検証ができるアプリの開発と、運用を可能にするマニュアルや仕組みの開

発を行う。アプリケーションとして以下の機能を含んだものとなる予定である。

発達障害青年・成人の以下のスキルチェックのプロトタイプの開発

- ・生活スキルチェックアプリの改訂版
- ・社会的スキルチェックアプリ
- ・就労ソフトスキルチェックアプリ
- ・メンタルヘルスチェックアプリ
- ・支援者の支援情報の蓄積モデルの導入

当初の半年から1年で、発達障害当事者に協力してもらって、開発を進めていく。実際に、発達障害当事者が活用した機能をさらに検討し、バージョンアップを重ねていく。一方で、日常生活スキル、就労ソフトスキル、余暇支援、メンタルヘルスの把握等に関して、実態を反映したアプリでの評価になるのかを検証していく。

実際に運用するためのアプリの開発は進んでおり、東京、徳島、石川の三ヵ所の実証検証を行った。今後、さらに多くの地域で実証検証する予定である。生活スキルや社会的スキル、就労ソフトスキル、メンタルヘルスをチェックできるように開発し、実際に発達障害青年・成人の当事者にチェックを行ってもらっている。

2-3. 実施内容・結果

今年度の到達点①(目標)

発達障害青年成人が実際に活用できるアプリケーションのプロトタイプの開発を行う。

実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

実施内容：

前年度に開発したアプリの日常生活支援(余暇支援)機能とスキルチェックアプリ機能(日常生活スキル、就労ソフトスキルやメンタルヘルス等)を、実際に発達障害青年成人に試用してもらいつつ、当事者の支援に取り組む全国の専門家たちや支援現場職員たちからの知見の収集や意見交換を行い、実際に活用しやすいアプリの開発を進めていった。各グループから追加・修正すべき機能や項目についての意見を出し合い、アプリのバージョンアップを進めた。(マネジメントG、アプリG、医療連携G、NPO生活G、就労支援G)

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

実施内容：

支援者が活用しやすいように、当事者の評価と支援者の評価を比較しやすくするとともに、支援者の評価や取り組みを、現場での支援記録として保管していく仕組みについての支援者の意見を基に、実際の結果のアウトプット形式や入力形式の開発を行った。福祉、医療、就労支援等の各領域に合ったアウトプットや入力の様式になっているのかどうか、意見を出し合った。その際に、個人情報の保護については現在も検討中である。

今年度の到達点②(目標)

妥当性と信頼性のある発達障害青年成人のアプリ評価の確立。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討をする

実施内容：

実際の標準的なアセスメント・ツールとの関連性の中で、今回のアプリでの評価が十分に妥当なものになっているのか適応行動を中心に検証していった。全国の協力施設や関係団体4か所（東京、金沢、岡山、徳島）にアプリを配布し、実際のデータの収集を行った。（マネジメントG、アプリG、NPO生活G）

実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際に試してみる

実施内容：

発達障害当事者の余暇活動の実態把握をアスペ・エルデの会以外に広げるとともに、アプリを用いた余暇活動の有効性を、実際に余暇活動に活用しつつ、データの収集を行った。（マネジメントG、アプリG、NPO生活G）

今年度の到達点③(目標)

プロジェクトについての広報啓発

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

実施内容：

アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施した（全国4か所；名古屋、東京、金沢、徳島）。年度末には統括的なシンポジウムを行い、実際のアプリを用いた支援についての方向性の確認を行い、支援者たちがアプリを活用するメリットの理解啓発をするとともに、支援者側・事業所側の使用におけるニーズを把握する機会とした。実際に複数個所での実施例を報告した。今後の社会実装に向けて、ネットワークを拡げていくための機会とした。関係する全国の専門家や関係施設・団体の関係者を招聘し、意見交換を行った。（マネジメントG、アプリG、医療連携G、NPO生活G、就労支援G）

(2) 成果

今年度の到達点①(目標)

発達障害青年成人が実際に活用できるアプリケーションのプロトタイプを開発を行う。

実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

成果：

アプリ開発は初期プロトタイプを開発した。イベントの項目については、イベント作成の通知機能や、問題ある発言を報告する機能といったより広い展開を見越しての機能を充実させた。実際に使ってもらい、上がってきた問題点をいくつか修正した。また、継続への要望として通知機能の要望が強いため、利用者の負担とならないような配慮などの検討を行っている。

開発したプロトタイプを運用し、大きく2つの課題が出てきた。

1つめは表記についての問題としてまず、漢字が難しかったと報告があった。これは各地で実証実験をする中で、アプリに慣れていない当事者で実施したため問題が表面化した。支援グループのアドバイスもあり、小学4年生以上の漢字にはルビをふる(右図)こととした。次に、当事者らに分かりにくい用語があった。例えば、「配偶者」や「自助グループ」については意味や、定義を問う質問が上がった。支援者がいたためその場で説明を行い対応したが、用語の使い方についても再検討するよう意見が出された。

2つめは管理の問題である。このアプリはエリアと呼ぶ地域か所属している施設でグループ分けをしている。このグループ間は個人情報保護やトラブルを未然に防ぐため交流が無い。そのため各エリアでのユーザの管理も個々をよく知る管理者を立てるべきと考えている。ただ、管理者の業務が煩雑になったりしないか、管理者の情報技術スキルをどこまで期待してよいか現在検討の最中である。また、エリアの管理者が変更となった際にはどのような引き継ぎがなされるべきか、当事者らが自主企画したイベントに施設の管理者は業務として関われないのではないかといった議論もなされ、継続して検討中である。

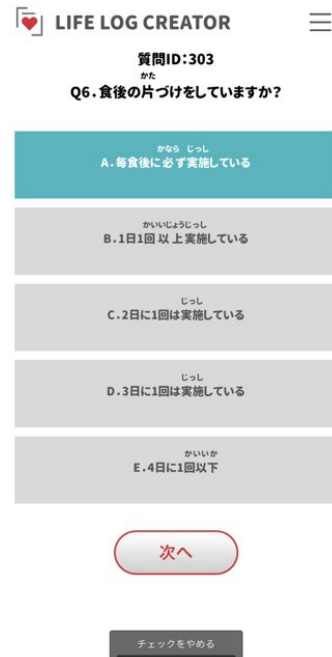
実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

成果：

アプリを通じてどのようなデータが活かせるのかの改善を行った。まず支援者らが、ペアとなっている当事者の状態を俯瞰して見られるようミニグラフ(右図)でペアを俯瞰できるよう改善した。さらに、チェック項目については、これまでの生活チェックに加え、新たにメンタルチェック28項目と仕事面のチェック20項目を加えた。チェック結果を分析するために学歴や配偶者の有無といった基本情報を取得する項目を追加した。

メンタルチェック項目の追加により、支援者等が当事者のメンタル状況を把握しやすくなった。ただ、メンタルチェックのどの部分に変化しているのかが分かりにくいこともあり、今後は細目表示を検討したい。

また、仕事チェックを追加したことで、当事者からも仕事を行う上でのどのような問題があるか視覚的にわかるようになった。ここから得られた気づきを元にどのような支援につなげるかの接続ができていない。



今後は支援の細目を検討しそれとチェック結果を対応させる作業が必要と考えられる。

データのアウトプット形式については、機能としては実装可能であるが具体的なアウトプットニーズを含め検討の途中である。こちらは引き続き開発をおこなう。

今年度の到達点②(目標)

妥当性と信頼性のある発達障害青年成人のアプリ評価の確立。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討をする

成果：

プログラムの評価には、旭出社会適応スキル尺度(肥田野、2012)のコミュニケーション因子と心理的居場所感尺度(則定、2008)の被受容感因子と精神的安定因子を用いた。双方とも数値が高いほどそれぞれの特性が高いと判断される。旭出社会適応スキル尺度は学生スタッフによる評価であり、担当メンバーの社会的スキルに関する観察記録も併せて回収した。事前評価と事後評価の双方の評価が可能であった9名についての結果を示す。

まず、心理的居場所感尺度について図1に示す。被受容感と精神的安定については、有意差は認められなかったが、被受容感と精神的安定についてはいずれもわずかながら事後評価の方が高かった。本データの特徴として事前評価の段階から被受容感と精神的安定因子の得点が高かった点である。本参加メンバーはNPO法人アスペ・エルデの会の支援合宿に何度も参加しているということと関連しているように思われた。

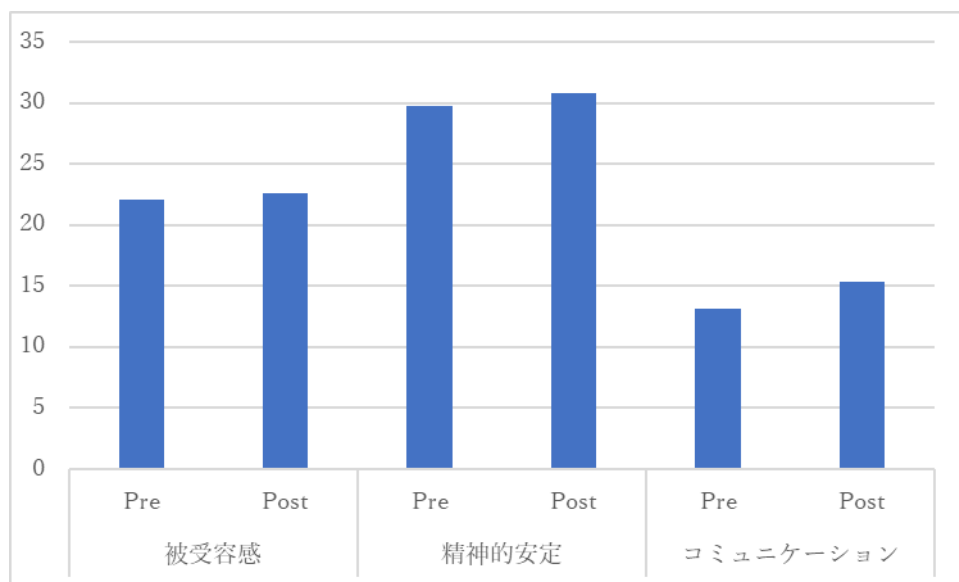


図1 参加メンバーの心理的居場所感とコミュニケーションスキルの変化

コミュニケーションスキルについては、10%の有意傾向ではあるが事前より事後評価の方が高い値を示した。コミュニケーションスキルの練習効果と考えられるが、本プログラムの特徴として以下のことが考えられる。初日のコミュニケ

ーションスキルについての心理教育を行い、その後、余暇支援アプリを用いて、当事者メンバーで何度もイベントを企画してコミュニケーションの実践を行った点である。また最後にプログラムディレクターからのフィードバック等があり、安全でかつ必要なコミュニケーションスキルの実践練習の場となったと考えられる。

プログラム内にて3分の1にあたる3名以上が改善を示したコミュニケーションスキルの項目を列挙すると以下である。「適切に視線を合わせ、あいづちを打つ」が5名、「会話を適切に終わらせる」が3名、「個人的な情報をむやみに教えない」が3名であった。自由記述による評価では、「会話の締めくくりがはっきりとしてきた」、「周囲を意識するようになった」、「相手の話に聞く耳を持つようになった」、「自分から話題を出したり、質問することができるようになった」など見られるようになった。

実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際に試してみる

成果：

2018年8月に愛知県南知多町日間賀島にて行われた発達障害児者の支援合宿の社会的支援プログラムにおいて、余暇支援アプリを用いた社会的スキルトレーニングプログラムを企画した。プログラムは8月16日～20日及び8月21日～24日のそれぞれ4泊5日の合宿中の8月17～19日と21～23日の2グループにわけて行われた。対象者は、NPO法人アスペ・エルデの会会員メンバー15名（男性11名、女性4名）である。

初日のプログラムは、メンバー同士および担当スタッフの自己紹介等を行った。担当学生スタッフには、担当メンバーの社会的スキルや課題となるところについて随時観察をしてメモしておくよう依頼し、合わせてプログラム内で成長した・改善した点も後に記録してほしい旨、依頼を行った。

プログラム開始時には、当事者同士でアプリのイベント企画を行ううえで必要な社会的スキルやコミュニケーションスキルについて、プログラムディレクターが心理教育を行った。具体的な内容として、例えば集団で発言者に聞く際の望ましい姿勢と態度などのスキルについて取りあげた。また、各自自分のスマートフォンや貸し出し用のタブレットを用いて、一般的なソーシャルネットワーキングサービス（以下、SNS）と類似した機能のあるアプリを使用するので、SNS使用の一般的な注意点についても取り上げた。

2日目は、日間賀小学校に移動し、スマートフォンやタブレットのカメラ機能を利用して自分が思う日間賀島の絶景写真を撮って、アプリのチャット機能にアップするように課題を与えた。1時間後に集合して各グループにて発表と共有をしていった。支援者は各グループを巡回し、上手くやれているといったように肯定的なコメントをおこなった。夜のミーティングでは各グループの発表とうまくやれていた点などを共有した。

3日目の午前中は、午後からの活動を計画するためにメンバーで話し合いを行い、スイカ割り、サイクリング、カフェ巡りなどのグループに分かれた。それぞれグループごとにアプリ内でイベントを作成し、チャット機能を使いながら詳細を決めていった。直接目を合わせて会話するよりも、チャットで会話する方が自分の

意見を言えているメンバーもあり、チャット機能を使うことでスムーズに話し合いが進められていた。実際の活動中は、それぞれのグループがチャットに写真を載せながら報告し、違う活動をしていながらも楽しさを共有していた。

4日目の午前中は、前日のことを振り返り、共有できた話題や楽しみについて振り返る時間を作り、話題や楽しみを共有できたこととその意味について考える時間を作った。4日目の夜には、合宿全体のキャンプファイヤーでメンバーたちが学んだ成果を報告する場面があったが、そこで他のプログラムに参加していたメンバーに“チャットの会話で気を付けること”や“ネットに写真や動画をアップするとき気を付けること”を発表していた。

まとめとして、余暇支援アプリを用いてコミュニケーションスキルのプログラムを試行し、その結果を分析した。筆者らの臨床的な感覚では余暇支援アプリは企画するイベントや目標をメンバーと支援者間で共有しやすく、また実際のコミュニケーションやチャット機能でのコミュニケーションの実践練習を重ねやすいと思われた。今回は、4泊5日間の支援合宿での行動上の変化であるが、毎回振り返りながら継続した社会的スキル支援を行っていくことで、コミュニケーションスキルの確実な学習と精神的健康の安定に寄与するものと考えられた。

今年度の到達点③(目標)

プロジェクトについての広報啓発

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

成果：

アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施した（全国4か所；名古屋、東京、金沢、徳島）。3か所で計50名ほどに参加していただき、実際にアプリを使えるように説明し生活チェックなどを実施してもらった。

また、2019年2月および3月に研究開発のためのセミナーを実施しアプリを用いた支援についての広報活動を行った。その際に、全国で実施した広報イベントについての簡単な報告も行った。

(3) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

発達障害青年成人が実際に活用できるアプリケーションのプロトタイプの開発を行い、実際に全国で3か所訪問しアプリを使用してもらった。今後さらに多くの地域で使用してもらうよう訪問をする予定である。また、福祉事務所でも実施ができるよう次年度中にソフトウェアを開発し、その後現場で実施してもらい、チェックを始めるという流れで進めていく予定である。

次年度に向けた課題として、記録するシステムの作成と個人情報の取り扱いの二点が挙げられる。個人情報については、登録の仕方や通知の送り方、パスワードを忘れたときの対応についてなどを考えていく必要がある。今後、研究会等に参加し相談をしながら取り組んでいく予定である。

(4) スケジュール

実施項目	平成29年度 (H29. 10～ H30. 3)	平成30年度 (H30. 4～H31. 3)	平成31年度 (H31. 4～H32. 3)	平成32年度 (H32. 4～ H32. 10)
発達障害者実態調査	←→			←→
アプリ開発	←→			
アプリの試験	←→			
利用実態の分析	←→			
アプリの提供				←→
現実的な支援の提供				←→
現実的支援の関連性分析				←→
支援マニュアルの作成				←→
支援の有効性の評価				←→

マイルストーン

2-4. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
H30/11/23	領域全体会議	JST東京本部	各プロジェクトの進捗状況等の報告を行った。
H30/12/11	戦略会議	中京大学豊田キャンパス	プロジェクトの進捗及び今後の予定を確認した。
H31/2/17	研究開発のためのセミナー	TKPガーデンシティPREMIUM名古屋ルーセントタワー	当事者の方にも参加していただき声を聞きながら、研究開発のための意見交換を行った。
H31/3/24	研究開発のためのセミナー・ワークショップ	TKP名駅東口カンファレンスセンター	当事者や保護者にも参加していただき、アプリのワークショップやセミナーを実施した。

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

東京・徳島・金沢の3か所でアプリの説明会を実施した。各地で生活チェック機能とお出かけ機能の使い方を説明し、実際に使ってもらった。保護者も一緒に参加してもらった場合は、生活チェックを確認できるように利用者とペアになってもらった。また、アプリ内でのイベント作成の仕方や、チャットの使い方を説明し実際に使ってもらった。今後さらに多くの地域で実施する予定である。

4. 研究開発実施体制

(1) マネジメント・福祉グループ

①辻井正次（中京大学現代社会学部）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：マネジメントグループはアプリ開発において、アプリの開発状況と実際の当事者の利用状況とを照合し、当事者からの要望や支援者からの要望を調整し、アプリ開発が順調に進むように調整を進めていく。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：アプリを活用して蓄積していく支援記録を、効果的な支援の開発につながるような形式に保存し、実際に支援者が支援記録になるようにアウトプット可能な形にしていく取り組みを行っていく。各グループで上がってきた課題をアプリグループと調整しつつ、形にしていく。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討をする

グループの役割の説明：メンタルヘルスや適応行動、職場でのソフトスキル等の、スキルの評価を、既存の標準化された心理検査との妥当性を検討していくことで、実際に活用できるアプリの中の評価項目を開発する。

実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際に試してみる

グループの役割の説明：当事者の支援活動にアプリを持ち込み、アプリを活用した支援の有効性や課題を抽出していく。実際の活動とアプリ開発との調整をマネジメントしていく。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施し（全国4か所；名古屋、東京、金沢、徳島）、また平成31年度のより多くの地域での広報イベントを準備する。さらに、年度末に平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、アプリの広報を含め、アプリを活用した支援についてのシンポジウムを行い、実際のアプリを用いた支援についての方向性の確認を行い、支援者たちがアプリを活用するメリットの理解啓発をするとともに、支援者側・事業所側の使用におけるニーズを把握する機会とする。

(2) アプリ開発グループ

①曾我部哲也（中京大学工学部）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：本グループは、発達障害青年成人が活用するアプリの開発を担っていく。他のグループから開発に必要な知見を集め、アプリの開発と試験運用を行っていく。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：アプリでのデータの蓄積や保管様式、アウトプットのための基本デザインを構築する。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討をする

グループの役割の説明：他のグループからの情報を受け、項目を尺度に取り込み、実際の評価可能な状況にして、データを蓄積していく。知的障害も含めた、生活困窮状態（ひとり暮らしが難しくなっている状態）の成人たちの知見を基に、内容的妥当性の検討を行う。

実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際に使ってみる

グループの役割の説明：アプリを実際に当事者の活動に試用しつつ、出てきた課題を基に、アプリについての機能のアップデートや改善に取り組む。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施し（全国4か所；名古屋、東京、金沢、徳島）、また平成31年度より多くの地域での広報イベントを準備する。アプリについての詳しい解説をHP等で周知していく。また、年度末に、平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、アプリの機能に関して説明を行い、アプリを活用した発達障害者支援についての提案を行う。

(3) 就労支援グループ

①井上雅彦（鳥取大学医学部）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：適応の重要な側面である就労において、就労のための社内ルールや社内での人間関係等の視点から取りまとめられた「ソフトスキル」のチェック機能をアプリに付加する等、アプリ開発に寄与する。ジョブマッチング等への展開も考えて、項目と仕組みに関しての提案を行う。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：アプリでの支援記録の管理する一方、就労の現場に対して、どういう項目をどのように現場に返していくのかも検討していく。企業でも活用可能なアウトプット様式の開発を目指す。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動
グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施し（全国4か所；名古屋、東京、金沢、徳島）、また平成31年度のより多くの地域での広報イベントを準備する。また、年度末に、平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、就労支援や企業での支援と生活支援の関連性など、知見を報告し、アプリを活用した支援の有効性について検討する。

（4）医療機関との連携構築グループ

①森則夫（福田西病院）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：本グループは、発達障害成人が合併しやすい、不安症状や抑うつ状態の合併への対応をしていくことで、適応状況が悪化することを医療的な視点で対応していくために、必要情報をアプリに盛り込む。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：薬物療法や服薬管理支援など、医療的な支援を、発達障害者向けのデイケアなどで、アプリを用いた取り組みを行う。そこでの成果から記録や保管、アウトプットのやり方に関して、提案を行う。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施し（全国4か所；名古屋、東京、金沢、徳島）、また平成31年度のより多くの地域での広報イベントを準備する。また、平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、メンタルヘルスや医療機関での支援と生活支援の関連性など、知見を報告し、アプリを活用した支援の有効性について検討する。

（5）NPOと生活支援グループ

①宮地菜穂子（NPO法人アスペ・エルデの会）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：実際に現実の支援グループを運営し、アプリの活用状況について把握していくとともに、当事者からも必要な機能ややりたいことを聴取し、アプリ開発につなげていく。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：当事者自身が自分の記録を把握し、適応状況を改善していくために、記録の保管の仕方や、必要な情報の提示、個人情報の保護など、活動の中での意見集約を行い、アプリの機能に付加していくための提案を行う。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討をする

グループの役割の説明：メンタルヘルスや適応行動、職場でのソフトスキル等の、スキルの評価ができるよう、継続的なアプリの使用を持続してもらうよう、全国の関連団体と連絡を取りつつ働きかけ、また、各地の支援者からの評価を回収していく。

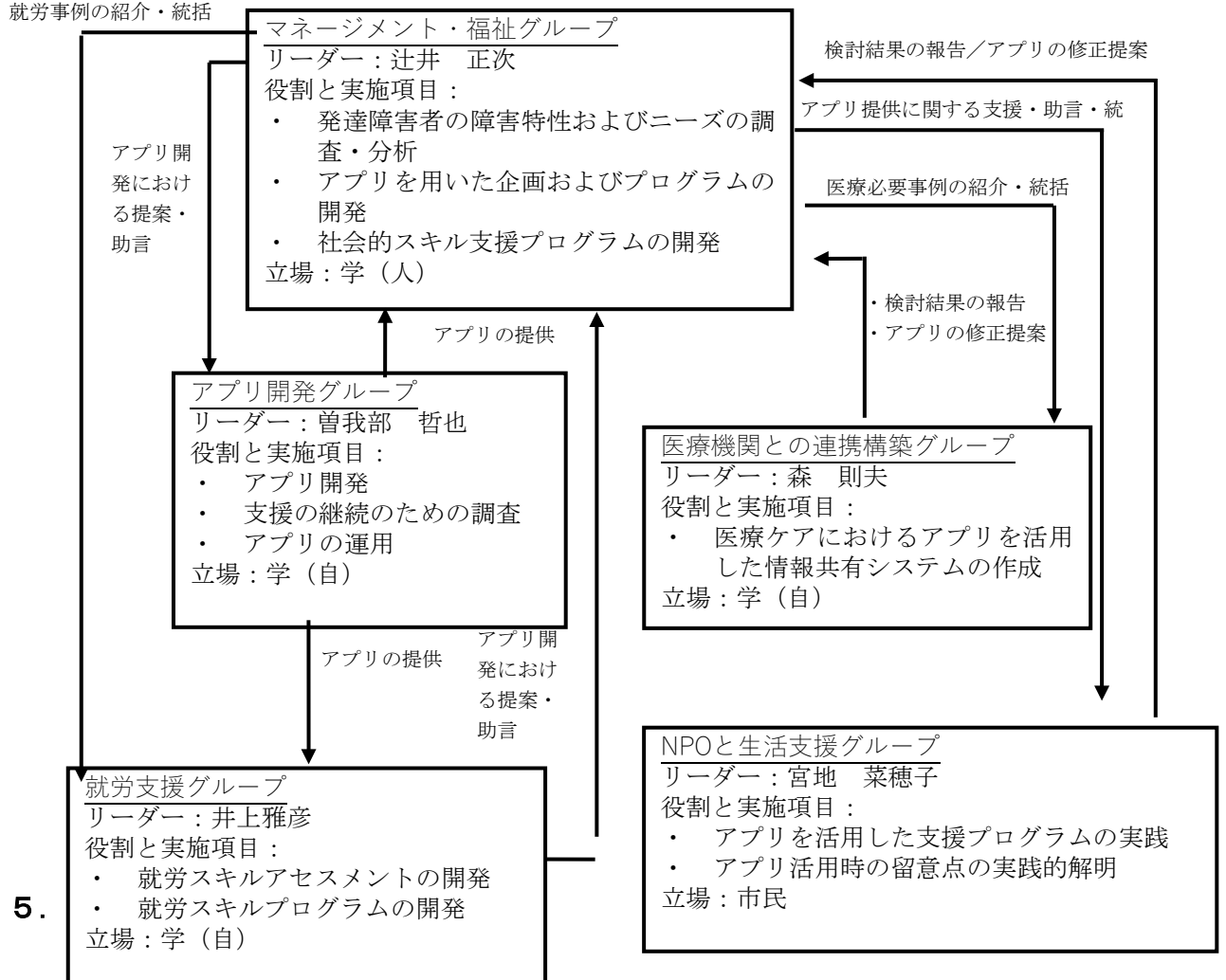
実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際を使ってみる

グループの役割の説明：発達障害当事者の余暇支援情報の収集や、関係団体の連絡調整等を行う。適応行動のなかでも、成人にとって重要度が高い、余暇活動や、余暇活動を通じた他者とのつながりづくりのバリエーションを把握し、アプリ開発と支援手法開発につなげる。アプリを用いた支援を試行し、その有効性を検証する。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施し（全国4か所；名古屋、東京、金沢、徳島）、また平成31年度より多くの地域での広報イベントを準備する。また、年度末に、平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、余暇活動の実態やそこでの課題等を明確にし、アプリを活用した余暇活動の可能性に関して、実際の試行を踏まえて、知見を報告し、アプリを活用した支援の可能性について検討する。

就労事例の紹介・統括



マネジメント・福祉グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
辻井正次	ツジイマサツグ	中京大学	現代社会学部	教授
明翫光宜	ミョウガンミツ ノリ	中京大学	心理学部	准教授
伊藤大幸	イトウヒロユキ	中部大学	現代教育学部	講師
黒田美保	クロダミホ	名古屋学芸大学	ヒューマンケ ア学部	教授
香取みずほ	カトリミズホ	中京大学	現代社会学部	研究支援員
中島卓裕	ナカジマタク ロウ	名古屋大学大 学院	教育発達科学 研究科	博士課程

アプリ開発グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
曾我部哲也	ソガベテツヤ	中京大学	工学部	准教授
和田三千穂	ワダミチホ	(株)ベイビー		代表取締役
西岡克真	ニシオカカヅマ	中京大学	工学部	特任研究員

NPOと生活支援グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
宮地菜穂子	ミヤチナオコ	NPO法人アスペ・エ ルデの会	事務局	事務局長
浜田恵	ハマダメグミ	名古屋学芸大学	ヒューマンケ ア学部	講師
田中尚樹	タナカナオキ	日本福祉大学	社会福祉学部	助教

就労支援グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職

				(身分)
井上雅彦	イノウエマサ ヒコ	鳥取大学	医学部	教授
高柳伸哉	タカヤナギノ ブヤ	愛知東邦大学	人間健康学部	助教
榎本大貴	エノモトタイ キ	Litalico研究所		研究員

医療機関との連携構築グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
森則夫	モリノリオ	福田西病院		院長
片山泰一	カタヤマタイ チ	大阪大学・金沢大 学・浜松医科大 学・千葉大学・福 井大学連合大学院	連合小児発達 学研究科	教授
中村和彦	ナカムラカズ ヒコ	弘前大学	医学部	教授
杉山登志郎	スギヤマトシ ロウ	福井大学	医学部	客員教授
鈴木勝昭	スズキカツアキ	小笠病院		院長
石川道子	イシカワミチ コ	海南病院	小児科	医師
野村昂樹	ノムラタカキ	福田西病院		臨床心理士

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
H31/2/17	発達障害と関わる“暮らしにくさ”を考える ー 複合的な当事者の困り感への支援につながる研究開発のためのセミナー	TKPガーデンシティ PREMIUM 名古屋ルーセントタワー	60名	当事者の方にも参加していただき声を聞きながら、研究開発のための意見交換を行った。
H31/3/24	研究開発のためのセミナー・ワークショップ	TKP名駅東 口カンファレンスセンター	80名	当事者や保護者にも参加していただき、アプリのワークショップやセミナーを実施した。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍・冊子等出版物、DVD等

報告書『発達障害と関わる“暮らしにくさ”を考える ー 複合的な当事者の困り感への支援につながる研究開発のためのセミナー報告書』中京大学現代社会学部辻井正次研究室発行。2019年2月17日。

(2) ウェブメディアの開設・運営

現在作成中

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

なし。

6-3. 論文発表

(1) 査読付き（___0件）

●国内誌（___0件）

●国際誌（___0件）

(2) 査読なし（___0件）

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議___0件、国際会議___0件）

(2) 口頭発表（国内会議___0件、国際会議___0件）

(3) ポスター発表（国内会議___0件、国際会議___0件）

6－5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

- (1) 新聞報道・投稿 (____0件)
- (2) 受賞 (____0件)
- (3) その他 (____0件)

6－6. 知財出願

- (1) 国内出願 (____0件)

- (2) 海外出願 (____0件)